

三重大学 海女研究センター だより

vol.11
三重大学海女研究センター
(三重大学人文学部総務担当)

☎ 059-231-9195

三重大学大学院生物資源学研究所附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター附帯施設水産実験所(以下、水産実験所)が鳥羽市小浜町に開所して2年半が経ちました。また、旧小浜小学校には水産実験所の宿泊施設および三重大学伊勢志摩サテライトの伊勢志摩産業振興教育研究センターも設置し、地域のかたがたのご協力のもとでさまざまな教育・研究プロジェクトを進めています。

お借りして鳥羽市での海洋教育推進事業についてご紹介いたします。

鳥羽市教育委員会は鳥羽市内の教育研究機関などで構成される海洋教育推進委員会を組織し、令和4年度を海洋教育元年としてさまざまな海洋教育プログラムを作成し、具体的な取り組みを開始しました。その中で我々は独自の海洋教育プログラムの構築と実践、既存の海洋教育プログラムのサポート、これらのプログラムが児童生徒や地域に与える影響についての調査などを行っております。

令和5年度の初めには、加茂中学校の理科の授業として生物採集・観察のプログラムを実施しました。このプログラムは、鳥羽市レッドデータブックも活用し、自分たちの校区の自然環境とそこに暮らす生き物に実際に触れてもらう機会として、担当の中学校の先生とともに構築したものです。夏には菅島小学校での生物採集・観察を、秋にはスナメリの観察、冬には

鳥羽東中学校でのウニの発生観察授業のサポートを計画しています。海洋教育プログラムが児童生徒らに与える影響の調査では、児童生徒に貸与されているタブレット端末を用いてアンケートを行い、リアルタイムで集計結果が関係者に共有されるシステムを構築・運用しています。アンケートの内容は、小学校5年生から中学3年生までを対象とした年1回の全体アンケートと、特定の海洋教育プログラムの前後に実施する個別アンケートの2種類を用意しています。このアンケートの実

施に際して、対象となる児童生徒の保護者のみなさまに向けて実施同意書を配布・回収させていただいております。保護者のみなさま、現場の先生がたにはお手数おかけしておりますが、調査結果を海洋教育全体の向上に役立てておりますので、引き続きご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

（助教 山本康介）

鳥羽・海藻文化革命 岩尾博士の 海藻博物記

vol.32

～ヒジキ養殖の話～

水産研究所 ☎ (25) 3316



研究所ではヒジキ養殖の試験を行っている。ヒジキ養殖をしたいとの声はよくいたただくので、試験を10年以上前から小規模だが続けているが、使える技術にできていない。

国内で流通しているヒジキの8割程度は中国や韓国産の輸入品であるが、国内産への需要は高い。しかしながら、天然のヒジキ場の減少、生長のタイミングの変化、付着生物が多い低品質品の増加などにより国産ヒジキの生産量は増えていかないという現状がある。三重県でもヒジキが激減している。鳥羽市沿岸は今のところ高品質なヒジキが多く生えているが、生長や品質が不安定になり水揚げ量も一定しないことが増えてきた。



胚のタネは落下後(100μm)の大きさは0.1mm程度。



テープ6週間(1mm)テープに付着させたもの。1mm程度に。



2か月後(1.5mm)水付なものを1.5mmの網で何回も培養したもの。1.5mmに。

研究所で漁師さんにも協力してもらいながら取り組んでいる方法は、6～7月にヒジキのタネ(受精卵)を採取し、これをロープやテープなどに付着させて水槽で種苗に生長させた後、海面養殖で生長させる、あるいは、タネを大きな水槽で培養して、少し大きくなったものをロープに挟み込むという単純なものだ。とにかく、養殖をするなら夏に採取したタネを翌春までに大きくしたいのだが、夏の間には基質から脱落したり、雑海藻に巻かれて枯れたりする。また、海に出すと、生長は良いが、マガキやフジツボが付いてヒジキが育たなくなるといふことを10年繰り返している。他県での試験を見学させてもらった際、少なくとも初期生長段階ではこの方法(厳密に言うところ少し違うのだが)で成功していたからだが、昨年は干出を取り入れ、初期の培養水温などを見直すことにした。今のところはなんとか枯らさずに生長させることに成功している。鳥羽の海ならではの可能性があるのかもしれない。